新しい「子ども観」を考えるために―見直すための提案

答えは自分の中に

◇馬居政幸（静岡大学教育学部教授）

1 四人の先生

現在、わが家の子どもは四人。高二の長男、中一の長女、小五の次男、小三の次女である。一人っ子の私が感じた子ども時代の寂しさをわが子には味わわせたくない、というのが少子化時代に抗して四人の子持ちになった動機だが、今のところ私の思いは伝わっていないようす。数の多さは熾烈な競争といじめの温床、互いに支え合う愛に目覚めて、親の苦労に感謝する日がくるには時間がかかりそう。ただし、教育事象の研究者である私にとって四人は、薄給すべてを費やしても得られない発見に導いてくれる先生。それを象徴するのが次の言葉である。

①「カミ、ハンカチわすれるな」
②「一分たったら教えて」
③「ズボンをはいてください」
④「そうやって決めつけるからできなくなるんだ」

2 遺伝子を超えて

①は次女が小学校入学直後に玄関のドアの内側に貼った紙に書いた言葉。紙とハンカチを学校へ持っていくことを忘れないためである。なぜこれが私の子ども観転換の契機となったのか。原因は上三人の入学時にある。

まず長男、誰に似たのか（妻の説では私）口は達者で人気者だが、通信簿の基本的生活習慣の欄は△印。その理由を本人に聞いてもかえってくるのは「ぼく知らない」。長男は元気だけがとりえの子ども（と思っていた）。

だが、長女の入学とともに理由が判明した。カミ、ハンカチなしに登校し、先生に注意された長女は（ここまでは長男と同じ）、帰宅後「お母さんのせいで叱られた」と妻を怒ったからである。不覚にも私も妻も毎朝持ち物検査があることを知らなかった。何よりもカミ、ハンカチが学校にとってそれほど重要とは想像できなかった。

長女は自分が良い子であることが当然と思っている子。ただし、親の手を借りなければ何もできない子でもある

（と思っていた）。「あなたが可愛がりすぎたからよ」これが妻の言い分。そのため妻は次男には上二人の失敗を繰り返すまいと、何でも自分でできるように躾けようとした。

では次男は忘れなかったか。

それほど子育ては甘くない。努力はするがブキッチョ（と思っていた）で失敗ばかりの次男にぶつける妻のいらだつ声が響くのみ。

その要領の悪い兄を見て育った次女はどうすれば叱られないかを心得ている。といっても忘れることは避けえない。そこで考えたのが紙を貼ること。

顔をみればメンデルの法則の見本のような四人だが性格は全く別。学校が評価する基本的生活習慣に遺伝子の力は及ばないようだ。

3 能力も多様に変化する

同じ親でもこれだけ違う。まして教室の中に集った子どもたちは親も家庭もすべて異なる。それを同じ教科書で同じ時間に同じ規則のもとに教えることがどれほど至難であるか。手のかかる四人の親として先生方に同情する。だがそれは、子どもの側から見れば、一つの尺度で評価されることがいかに理不尽なことか、ということでもある。

さらに育ちと性格の違いは学校が評価する能力にも現れる。それを教えてくれたのが②。次男が二年の時、帰宅した私にストップウオッチ片手に語りかけてきた時の言葉である。

私は何のことかわからないままに時計を受け取りスイッチを押した。すると次男はもっていたカードをめくりながら「ニシがハチ……」と猛スピードで言いはじめた。九九の練習である。

私は驚いた。上二人で苦労したからである。九九は二年の秋から暮れにかけて毎晩風呂に入れながら覚えさせるのが父親としての私の役割。だが努力のかいなく長男はクラスでビリから二番目、長女も同様であった。

だが次男は自分で努力している。妻の自立へのしつけの効果がやっと現れてきたと喜んだが、事はそれほど単純ではなかった。

妻の話によると、家庭では兄と姉のいじめと妻の叱咤にいじけるドジな次男も教室では優等生。それもガリ勉タイプではなく、元気一杯のハツラツリーダー。その面子にかけても九九暗記で一番になりたかったとのこと。私には、家と学校に異なる次男がいるとしか思えなかった。

次女の場合はどうか。一昨年の秋、何気なく「九九知ってるか」と聞いてみた。答えは「知らない」。だが、私が「ニニンガ」と言うと「シ」と応じた。九九という言葉は知らないが中身はほとんどインプット済み。次男の声を聞いて育ったからである。

繰り返すがみんな私と妻の子ども。だが小学校の成績が上なのは次男次女である。ただし現在の長男の志望は工

学部、数学が得意だからである。

④ 親を越えて

教師が教室の授業で判断できるのは子どもの能力の一部。それもわが家の場合はもって生まれた能力よりも家族関係の影響といったほうが妥当。幸いなことに小二の長男の担任は長男の楽天性の方に期待をかけてくれた。もし九九ができないことにこだわる先生であれば、私が全く理解できない数式と格闘する現在の長男の姿はなかったであろう。では長女の場合はどうか。

③は長女が小五の夏、風呂あがりにパンツ一つで涼んでいた私に向けた言葉。驚く私の耳元で妻が「レディの前で失礼よ」とささやいてくれた。

長女はいつのまにか私が入れない世界にいた。もう子どもではないということである。思春期とは男の子と女の子が男と女になるためにあがき迷う世界。迷いはこれまで自分を育ててくれた者の世界への反抗として現れる。

一人の女性として扱われるからこそ女性として生きる。一人の人間として扱われるからこそ自立できる。思春期にある者に、子どもという言葉を用いてかかわることへの疑問符を、長女の言葉は教えてくれた。

④は一昨年の冬休み、高性能の組み立て式レーシングカーを欲しがる次男に対して、できるわけがないと決めつけた私に向けて、語気荒く言い放った長男の言葉。そこには私の知っている楽天家の長男ではなく、理不尽なラベルリングを拒否する明確な意思で貫かれた一人の若者がいた。

⑤ 子ども観の理想は何処に

どのような子ども観であれ、必ずはみ出る子どもがいるはず。ある時点で当てはまっても、別の時点ではズレるはず。次男のように表現する世界の変化に応じて全く異なる姿を示すはず。次女のように意識しないままに異なる自分を育んでいるはず。だがもし教師が評価を変えなければ、その評価に応えるために、子どもは過去の自分の姿を演じ続けなければならない。

さらに長男と長女の言葉が示唆するように、親や教師の子ども観を拒否することこそ、一人の人間として自立するための条件のはず。だが、親や教師が子ども観の枠内で対処する限り、子どもであり続けなければならない。

どこかに理想的な子ども観があり、それを知ることが教師としてのあるべき姿と思っている方がいないか。

重要なのは子どもの変化に応じて、教師の側の評価を書き換え続けること。問うべきは、教師自身の、具体的な名前をもった目の前の子どもへの関わり方である。

最後に、父親の呪縛から解き放たれた次男は、長男の助けをえながらではあるが、見事にレーシングカーを組み立てたことを付記しておきたい。

新しい「子ども観」を考えるために—見直すための提案

「見る」世界と「成る」世界に架橋する

◇堀内　守（名古屋大学教授）

結びつけること

物事との関連なしには意味は生まれない。

右の脳は、全体像を見、カタチを見る。左の脳は、割り切り、筋を通し、辻褄を合わせる。

だから、一見関係なさそうなものに関連をつけさせることは、左の脳と右の脳に橋渡しをすることである。≪学ぶ≫という仕組みはこの≪橋渡し≫。

その≪橋渡し≫の風景を、まずは左脳的に描いてみようぞ。

〔学ぶ者は、まわりの環境との関連をもち、情報を仕入れ、統合しようとする。そして、新しいものを取り入れている者は、その視野を拡げている。場合によっては、それまでの在り方が崩壊し、新しいカタチで再編される。そのたびに≪新しい概念≫が採り入れられる。歩き始めたとき、しゃべり始めたとき、文字を覚えたとき、泳げるようになったとき、外国語を学び始めたとき、われわれのなかには≪新しい概念≫がつくりあげられ、そのつど、≪考え方の枠組み≫は変化した〕。

次に、同じ風景を、右脳的に描いてみようぞ。

〔新しいものを学んだとき、われわれはまずショックを受ける。そして、不安感、過度の刺激、緊張感、混乱、苦痛、恐怖などをおぼえ、学ぶことがあたかも闘いのようになってくる。さりとて、逃げ出してはいけない。勇気をもって次の一歩を踏み出し、さらに一歩一歩進んでいかなければならぬ。恐れを受けとめながら、立ち止まらず進む。やがて、恐怖はなくなり、自信がもてるようになる〕。

ずいぶん違う。だが、この違いが大事である。

流線型のマヤカシ

都市化と少子化が進むにつれ、「子ども観」は、だんだんと左脳型風景になっていった。行き着いたところが流

現代教育科学／1995年2月号 №459

特集 「子ども観」をどう変えていくか

●「子どもの現在」から「子ども観」をとらえる

少子化現象から「子ども観」をとらえ直す……馬庭 清志 5
登校拒否現象から「子ども観」をとらえ直す……舛田 安生 8
いじめ現象から「子ども観」をとらえ直す……中野 英康 11
幼児化現象から「子ども観」をとらえ直す……白川けいこ 14
塾通い現象から「子ども観」をとらえ直す……石黒 修 17

●文部省の「子ども観」が変わった

『新しい学力観に立つ教育課程の創造と展開』の子ども観……庭野 三省 20
『個性を生かす進路指導をめざして』の子ども観……大鐘 雅勝 25

●子どもと共に授業を創ってきた研究校の「子ども観」

安東小学校の「子ども観」……星野恵美子 30
堀川小学校の「子ども観」……藤井 千春 34
奈良女子大学文学部附属小学校の「子ども観」……相部 芳徳 38
戦後教育50年―「子ども観」の変遷……明石 要一 42

●「子ども観」をめぐる今日的問題

校則の賛否をめぐる「子ども観」……村井 敏幸 48
制服の賛否をめぐる「子ども観」……大谷 和明 52
「性善説」「性悪説」をめぐる「子ども観」……野口 芳宏 56

●「子ども観」の形成と展開

子どもの権利条約の「子ども観」……喜多 明人 60
守る「客体」から表現する「主体」支援へ……井上 裕吉 64

●新しい「子ども観」を考えるために―見直すための提案

答えは自分の中に……馬居 政幸 68
「見る」世界と「成る」世界に架橋する……堀内 守 71
虐待と主体―サバイバーのエンパワーメント……森 実 74
「子ども」や既成の「教育」ではどうにもならない……木原健太郎 77
愛他心を育てよ……長野 正 80

教育ニュース・ズームアップ
1 5年度「問題行動白書」まとまる……安達 拓二 83
2 学校週5日制拡充で次官通達出す

★連載／論壇時評・59
子どもと教師が成長する北条小学校の教育システム……明石 要一 91

☆リレー連載／新しい学校づくりへの提言・11
中学校「楽しい学校づくり」の具現化……高橋 正和 95
教師は未来をみつめているか……下村 俊雄 98

◆リレー連載／授業改革の課題・11
授業研究と教育工学の接点……水越 敏行 101

★連載 時代が変わる・授業も変わる・11
今学校は、何を、どうすべきか?……有田 和正 106

◆連載／新学力観と基礎学力・11
個性・創造性と基礎・基本……安彦 忠彦 111

（表紙写真提供・㈱モントレ）